古事記かるたについて

古事記かるたは、日本で最も古い書物である『古事記』の世界に、子どもの時から（対象は小学四年生以上）楽しく遊びながら、親しんでもらうことを目的に、奈良県が作ったものです。このかるたは、『古事記』にでてくる物語の中から、知っておいてほしい場面を選び、五十枚の字札と五十枚の絵札にしました。字札と絵札は二枚一組になっています。また、五十枚の字札のうち四十五枚は、名場面の様子を短く、調子よくまとめた言葉を記した物語編、残りの五枚は、『古事記』に登場する歌の中から特に有名なものやすばらしいものを選んだ歌謡編としました。

言葉と歌は、遊びながら何度も口に出して読んでみましょう。遊んでいるうちに、もっと『古事記』のことを知りたくなったら、ぜひ『古事記』という書物を読んでみてください。昔の言葉で書いてあるので、そのままでは難しすぎるかもしれません。そんなときは、『古事記』をもとに書かれた物語やマンガなどを探して、読んでみてください。また、『古事記』には奈良県内の地名がたくさん出てきます。大人の方といっしょに『古事記』に出てきた場所を訪ねてみるのもおすすめです。

『古事記』ができるまで

『古事記』は奈良時代の和銅五年（七一二）に完成しました。今ある書物の中では日本でもっとも古いものです。

始まりは飛鳥時代。天武天皇は、新たな国づくりを目指す中で、国の成り立ちを説明するために『古事記』をまとめることを考えました。『古事記』の序によると、最初に、さまざまな家から『帝紀』[注1]と『旧辞』[注2]を集めましたが、天武天皇は「これらは国家組織の根本であり、天皇の政治の基礎となるものだが、事実とは違う部分が多い。間違いをけずって真実を記録し、後の時代に伝えよう」と述べ、一度聞いたことは忘れることがなかったという稗田阿礼に読み覚えさせました。しかし、完成することなく時代が過ぎていきました。

天武天皇から三代あとの元明天皇の時代、稗田阿礼が記憶していたことを太安万侶がまとめ、ついに和銅五年（七一二）、『古事記』が完成したのです。

『古事記』に書かれていること

『古事記』は、上巻、中巻、下巻の全三巻からなります。上巻には、序に続き、天地の始まりからの神々の物語、中巻には、初代天皇である神武天皇から第十五代の応神天皇までの、下巻には第十六代仁徳天皇から第三十三代推古天皇までの、天皇についての出来事や言い伝えなどが収められています。よく知られている稲羽の素兎や八俣の大蛇などの話は、上巻に出てきます。また、中巻、下巻には今も残る奈良の地名が多くみられます。全体をとおして、歌謡が多くはさみこまれているのも『古事記』の特徴のひとつです。

注1　各天皇の即位から亡くなるまでの出来事などをまとめた書物

注2　神話や言い伝え、歌謡などを集めた書物

みんなで遊ぼう！ 古事記かるたの遊び方

その1 かるた取り

三人以上

1 読み手（一人）と取り手を決めます。

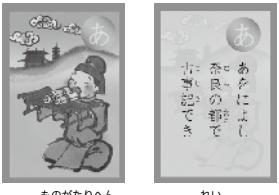
2 広い場所に、絵札五十枚の絵の面を上にして、重ならないように置きます。

絵札（例）

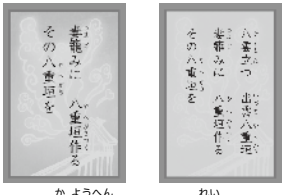
字札（例）

3 読み手が字札五十枚を一枚ずつ読み上げ、取り手は、ペアになっている絵札を探しましょう。早く取ったほうが絵札をもらえます。最後に、取った絵札の枚数が多い人が勝ちです。歌謡編の絵札は、歌の途中の文字から始まっています。

●物語編の四十五組だけを使って遊ぶこともできます。



物語編のペア（例）



歌謡編のペア（例）

その2

ふることぶみパズル

一人

絵札五十枚の裏面はパズルになっています。全部組み合わせると、左のイラストができあがります。

根之堅州国
綿津見神の宮

その3

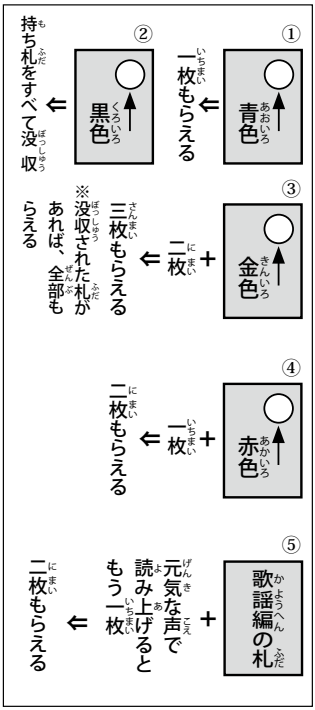
ふることぶみめくり

二人以上

1 物語編の絵札四十五枚と、歌謡編の字札（全文が載っている札）五枚を裏返して合わせ、よく混ぜてから、二つの山に積み上げます。

2 ジャンケンなどで、めくる人の順番を決めます。

3 順番に、二つの山のどちらでもよいので一枚ずつ札をめくっていきます。最初の一文字の枠が何色かによって、札をもらえる枚数がちがったり、没収されたりします。



①青色なら、その一枚だけをもらえます。

②黒色なら、何ももらえず、持っていた札はすべて没収されます。

③金色なら、もう二枚（合計三枚）もらえます。もしも没収された札があれば、その札を全部もらうことができます。

④赤色なら、もう一枚（合計二枚）もらえます。

⑤歌謡編の札なら、その歌謡を元気な声で読み上げ、さらに一枚（合計二枚）もらえます。

二つの山がなくなったとき、手元にある枚数が多い人が勝ちです。

古事記かるた物語編一覧

1

いにしえの世界へ探検古事記

『古事記』は「こじき」、または「ふることぶみ」と読みます。日本に残っている一番古い書物で、和銅五年（七一二）に奈良で完成しました。天地の始まりと、神様が世界を作っていく物語、また、各天皇の時代ごとに起こったことや言い伝えなどが書かれています。（上巻・序）

2

稗田阿礼と太安万侶 力合わせて古事記完成

『古事記』を作ろうと最初に考えたのは、飛鳥時代の天武天皇です。記憶力ばつぐんの稗田阿礼に、古くから伝えられてきたことなどを読み覚えさせました。その後、阿礼の話を太安万侶がまとめ、『古事記』ができ上がりました。（上巻・序）

3

あをによし奈良の都で古事記でき

『古事記』が完成したのは奈良時代の和銅五年（七一二）で、天武天皇から三代後の元明天皇の時代でした。元明天皇は、『古事記』が完成する二年前の和銅三年（七一〇）に、都を藤原京から奈良の都・平城京に移しました。（上巻・序）

4

こをろこをろ天の沼矛で島を生む

ただよっている地上の世界を固めるため、伊耶那岐命と伊耶那美命は天の浮橋に立って、天の沼矛という道具でかき回しました。引き上げた矛の先からぽとぽと落ちた潮が積もり、淤能碁呂島になりました。（上巻）

5

伊耶那岐は伊耶那美追って黄泉に行き

伊耶那岐命と伊耶那美命は次々に国や神様を生み出しましたが、伊耶那美命は火の神様を生んだとき、大やけどで亡くなってしまいました。伊耶那岐命は悲しみ、あの世の国である黄泉国へ伊耶那美命を探しに行きました。（上巻）

6

目から鼻から生まれた三貴神

黄泉国から戻った伊耶那岐命は、体を洗って身を清めました。すると、神様が次々に生まれ、最後に、左の目を洗うと天照大御神、右の目を洗うと月読命、鼻を洗うと建速須佐之男命という、貴い三柱の神様が生まれました。（上巻）

7

清く明き心の証しとうけいする

建速須佐之男命は高天原をうばうために やって来たと、姉の天照大御神に疑われました。そこで、「うけい」という占いをして子を生み、心が清らかなことを証明しました。命の持ち物の剣からは女神が生まれ、戦う気持ちがないことがわかりました。（上巻）

8

天照大御神は天の石屋に世は闇に

建速須佐之男命が高天原で暴れたので、天照大御神は「天の石屋」に閉じこもり、岩の戸を閉めてしまいました。すると、世界じゅうが真っ暗になってしまい、悪いことが次々と起こりました。（上巻）

9

天宇受売 踊って神を 誘い出す

天照大御神が閉じこもった「天の石屋」の前で、天宇受売命が神がかりして踊ると、神様たちは大笑い。不思議に思った天照大御神が岩の戸を少し開け、外を見ようとしたとき、天手力男神が大御神を引っ張り出し、世界はまた明るくなりました。（上巻）

10

須佐之男は 出雲国に 追いやられ

建速須佐之男命が高天原で暴れたことを怒った神様たちは、罰として命のひげと手足の爪を切って、高天原を追い払いました。追い払われた命は、出雲国にたどり着きました。（上巻）※出雲国は、今の島根県です。

11

八俣の大蛇 酒に酔わせて 退治する

出雲国では八俣の大蛇が人びとを苦しめていました。建速須佐之男命は大蛇に酒を飲ませ、酔って眠ったところを退治しました。大蛇の尾を切ったときに出てきたすばらしい剣（草なぎの剣）は、天照大御神に差し上げました。（上巻）

12

大穴牟遅が助けた稲羽の素兎

稲羽の素兎は、わにをだましたことがばれて皮をはがされてしまいました。大穴牟遅神の兄たちの八十神にもいじめられ、兎は泣いて苦しんでいました。通りかかった大穴牟遅神が傷の治し方を教えてあげて、兎は元気になりました。（上巻）　※大穴牟遅神は大国主神のことです

鼠が教えた「内はほらほら外はすぶすぶ」

大穴牟遅神は建速須佐之男命の娘・須勢理毘売命と出会い、結婚しました。怒った建速須佐之男命は、野原に矢を射て大穴牟遅神に取りに行かせ、その野原に火をつけましたが、鼠が野原の下に穴があると教えてくれたので無事でした。（上巻）

13

14

大国主少名毘古那と国づくり

大国主神のところに、小さな神様がやってきましたが、だれも名前を知りません。田んぼのかかしの久延毘古だけが、少名毘古那神という名前を知っていました。大国主神は少名毘古那神といっしょに、出雲で国づくりをしました。（上巻）

15

国ゆずりせまった神は建御雷

建御雷神は出雲国の海の波打ち際に、剣をさかさまに立て、その剣の先に座り、葦原中国を治めていた大国主神に、国をゆずるように言いました。大国主神は二人の息子と相談し、葦原中国を高天原の神様にゆずることにしました。（上巻）

16

天孫降臨先導したのは猿田毘古

天照大御神・高木神は、地上の葦原中国は自分の子孫が治める国と考え、邇々芸命を地上に天降しました。天降る途中、猿田毘古神が迎えに来てくれました。（上巻）

17

釣り針を探し綿津見神の宮

火遠理命（山佐知毘古）は、兄の火照命（海佐知毘古）から借りた釣り針をなくし、それを探すうちに海の底の綿津見神の宮に行き、その娘の豊玉毘売命と結婚しました。楽しく暮らした後、綿津見神に釣り針を見つけてもらい、陸に戻りました。（上巻）

18 船出して 大和を目指す 神武東征

神倭伊波礼毘古命（のちの神武天皇）と兄の五瀬命は、高千穂宮で国を治める場所を相談し、東へ向かうことにしました。日向から船を出し、豊国、筑紫、安芸、吉備と進んでいきました。（中巻・神武天皇）

※日向は今の宮崎県、豊国は今の大分県・福岡県東部、筑紫は今の福岡県、安芸は今の広島県、吉備は今の岡山県・広島県東部です。

19 導くは 神の使いの 八咫烏

高天原の天照大御神・高木神の命を受けて、建御雷神は、神倭伊波礼毘古命（のちの神武天皇）に不思議な力をもつ大刀を与えました。さらに、凶暴な神たちが待っている道を無事に進むために、八咫烏という大きなカラスに道案内をさせました。（中巻・神武天皇）

20 兄宇迦斯の たくらみ告げる 弟宇迦斯

神倭伊波礼毘古命（のちの神武天皇）が宇陀に着いたとき、その地に暮らす兄宇迦斯は命をだまして倒そうとしました。それを知った弟の弟宇迦斯は兄の御殿にわなが仕掛けてあることを教え、命は助かりました。（中巻・神武天皇）

21 神武天皇 橿原宮で 即位する

神倭伊波礼毘古命はさまざまな荒れすさぶ神たちを平定して、畝傍山のふもとの橿原宮で最初の天皇として即位し、世の中を治めました。（中巻・神武天皇）

22 長い糸たどって行けば 三輪の山

夜中、美しい活玉依毘売のもとに、立派な姿の男性がやってきて一緒になりました。両親に教えられ、男性の服のすそに糸をつけた針を刺してたどると、三輪山の社に着き、男性は大物主大神だとわかりました。（中巻・崇神天皇）

23 沙本毘売は 夫と兄との 板ばさみ

垂仁天皇の后・沙本毘売命は、兄の沙本毘古王から天皇と自分とどちらを愛するか尋ねられ、天皇を倒すように言われます。そのことを知った天皇は兵を出して沙本毘古王を倒し、沙本毘売命も亡くなりましたが、子どもの本牟智和気御子は取り戻すことができました。（中巻・垂仁天皇）

24

ときじくの かくの木実は 間に合わず

垂仁天皇は、遠い常世国から「ときじくのかくの木実」を持ってくるよう多遅摩毛理に命じました。実を持ち帰ると、すでに天皇は亡くなっていました。多遅摩毛理はお墓に向って実を高く持ち上げ、泣き叫びながら亡くなりました。（中巻・垂仁天皇）

※「ときじくのかくの木実」とは「いつも輝く木の実」という意味です。

25

美しき 少女になって 熊曾討つ

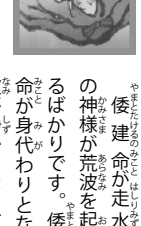
景行天皇の子の小碓命は、父から熊曾建を討ち取るように命じられました。命は髪型や着物を少女のようにして、熊曾建の宴会にまぎれこみ、退治しました。熊曾建は命の強さをほめたたえ、「倭建御子」という名前を贈りました。（中巻・景行天皇）

26

草なぎの 剣が救う 危機一髪

倭建命は東の方に戦いに行く途中、伊勢大神宮に寄り、おばの倭比売命から草なぎの剣と火打ち石をもらいました。だまされて野原に火をつけられたとき、倭建命は草なぎの剣でまわりの草を切り払い、向かい火をつけて助かりました。（中巻・景行天皇）

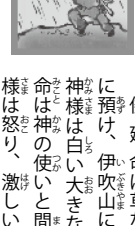
27



荒波を 静めるために 身を捧げ

倭建命が走水海を渡ろうとすると、海の神様が荒波を起こし、船がぐるぐると回るばかりです。倭建命の妻・弟橘比売命が身代わりとなって海に身を沈めると、波が静かになり、船を進めることができました。（中巻・景行天皇）

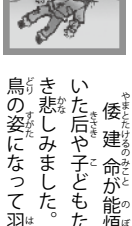
28



白猪の 姿の神を あなどりて

倭建命は草なぎの剣を妻・美夜受比売に預け、伊吹山に出かけました。伊吹山の神様は白い大きな猪の姿で現れましたが、命は神の使いと間違えてしまいました。神様は怒り、激しい氷雨を降らせ、命をすっかり弱らせてしまいました。（中巻・景行天皇）

29



天翔ける 大きな白い 鳥になり

倭建命が能煩野で亡くなると、大和にいた后や子どもたちがみなやってきて、泣き悲しみました。やがて命は大きな白い千鳥の姿になって羽ばたき、浜に向って飛んでいきました。みんな泣きながらその後を追いかけました。（中巻・景行天皇）

30

裳の糸に 飯粒つけて 鮎を釣る

神功皇后は四月上旬に玉島里の川で、着物の糸を抜き取り、飯粒をえさにして鮎を釣りました。このときから、この川では同じ時期に女性たちが着物の糸と飯粒で鮎を釣るようになりました。（中巻・仲哀天皇）

31

気比大神と 名前を替えた 大鞆和気

大鞆和気命（のちの応神天皇）が敦賀に行ったとき、おともの建内宿禰命の夢に土地の神様が現れ、自分の名前と大鞆和気命の名前とを替えようと言いました。承諾すると、翌朝たくさんのイルカを贈り物としてくださいました。（中巻・仲哀天皇）

32

大贄を 捧げる歌を うたう国主

吉野の国主という人たちは、応神天皇にお酒を差し上げる時、楽器の代わりに口で音を出し、いろいろな仕草をしながら歌をうたいました。その後、その地では、天皇に大贄（特別な食べ物）を捧げる時にその歌をうたうようになりました。（中巻・応神天皇）

33

税はとらぬ かまどに煙 立つまでは

仁徳天皇は、かまどから煙が立ち上っていないのを見て、人々が暮らしに困っていることを知りました。そこで天皇は税をなくし、宮殿の修理もやめました。三年後、人々の家のかまどからは再び煙が立ち上るようになりました。（下巻・仁徳天皇）

34

石之日売 御綱柏を 海に捨て

仁徳天皇の皇后・石之日売命は宴会に使う御綱柏の葉を取りに船で出かけました。その間に、天皇が別の女性と仲良くなったことを知って、皇后はたいへん怒り、せっかく集めた御綱柏を全部海に投げ捨ててしまいました。（下巻・仁徳天皇）

35

つぎつぎに 変わる蚕で 仲直り

蚕は幼虫から、まゆを作ってサナギとなり、やがて成虫となる蛾の一種で、まゆから生糸を取ります。仁徳天皇は蚕を見ることを口実に、けんかをしていた皇后・石之日売命のもとに行き、仲直りすることができました。（下巻・仁徳天皇）

36

隼よ 鷦鷯を取れと 機を織る

女鳥王は夫の速総別王に「隼よ、鷦鷯を取ってしまえ」と機を織りながら歌いました。隼とは速総別王のこと、鷦鷯とは大雀命（仁徳天皇）のことです。この歌を知った天皇は軍勢を集め、逆に二人を倒しました。（下巻・仁徳天皇）※鷦鷯はミソサザイという鳥のことです。

37

すばらしき船 たからかに響く 琴となる

一本の巨木で造った船「枯野」はたいへん速く、仁徳天皇の飲み水を淡路島から運びました。この船が壊れたので、船材を焼いて残った木で琴を作りました。この琴の音は遠くまで響き、人々は歌をうたって琴をほめたたえました。（下巻・仁徳天皇）

38

御殿から 天皇救い 大和へと

墨江中王は天皇の位をねらい、履中天皇が寝ている御殿に火をつけました。天皇は阿知直に助け出され、大和に向かいました。途中、天皇は燃える御殿を遠くから見て、残してきた皇后を心配する歌をうたいました。（下巻・履中天皇）

39

恋しくて 伊予へ追い行く 衣通王

次の天皇になることを約束されていた木梨之軽太子は人々の信頼を失って、ついには捕えられ、伊予の道後温泉に流されました。妹の衣通王は太子を恋い慕って伊予へ行き、太子と再会しました。（下巻・允恭天皇）※伊予は今の愛媛県です。

40

天皇の お召しを待って 八十年

雄略天皇は引田部赤猪子を見て、すぐ呼び寄せるから結婚せずに待っているよう命じました。しかし天皇はそのことを忘れ、赤猪子はとうとう八十年も待ち続けました。赤猪子は自分から天皇に会いに行き、歌を交わしました。（下巻・雄略天皇）

41

虻食べた 蜻蛉にちなむ 蜻蛉島

野原へ狩りに出かけた雄略天皇の腕を虻がかみましたが、その虻を蜻蛉がくわえて飛び去りました。天皇は蜻蛉をほめ、大和国は蜻蛉島とよぶのにふさわしいと歌によみました。この場所は阿岐豆野と呼ばれるようになりました。（下巻・雄略天皇）

古事記かるた 歌謡編 一覧

42

猪に追われて榛の木に登り

雄略天皇が葛城山に登ったとき、大きな猪が現れました。天皇は矢で射ましたが、猪はうなり声をあげて近づいてきます。天皇は榛の木に登って逃げ、助けてくれた木への感謝を歌にしました。（下巻・雄略天皇）※榛はハンノキのことです。

43

一言主天皇たちと瓜ふたつ

雄略天皇が従者と葛城山へ出かけると、自分たちとそっくりな人たちと出会いました。それを見た天皇は失礼だと怒りましたが、相手が葛城之一言主之大神とわかると、大刀と弓矢、従者の衣服を大神に差し上げました。（下巻・雄略天皇）

44

杯の木の葉をめでたく歌にして

お酒に落ち葉の浮かんだことを知らずに雄略天皇に杯を捧げた三重の采女に、天皇は怒って罰を与えようとしました。すると三重の采女は、落ち葉が浮かんだことをめでたいこととして歌にうたい、天皇をほめたたえ、罪を許されました。（下巻・雄略天皇）※采女は宮中で働く女性のことです。

45

譲り合う意祁と袁祁とは王子なり

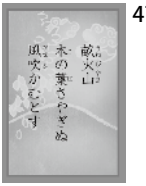
意祁命と袁祁命の兄弟は身をかくして馬飼い・牛飼いの仕事をしていました。ある日、お祝いの席で二人は舞う順番を譲り合って、履中天皇の孫であることを歌であかしました。兄弟は宮殿に迎えられ、二人とも後に天皇になりました。（下巻・清寧天皇）

46

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに八重垣作るその八重垣を

建速須佐之男命は八俣の大蛇を退治して櫛名田比売を救い、妻にしました。そして、須賀という土地に新しい宮を造りました。その時、そこに立ち上った雲を、妻の住む宮を幾重にも囲む垣のようだと歌によみました。（上巻）

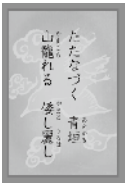
47



狭井河よ 雲立ち渡り
畝火山 木の葉さやぎぬ 風吹かむとす

神武天皇が亡くなった後、天皇の子の当芸志美々命は、皇后だった伊須気余理比売を妻にし、比売の子である三人の弟を倒そうとしました。比売は歌で息子たちに危険を知らせ、聞き知った息子たちは、当芸志美々命を打ち負かしました。（中巻・神武天皇）

48



倭は 国の真秀ろば
たたなづく 青垣 山籠れる 倭し麗し

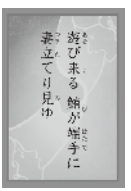
倭建命は、父・景行天皇の命令で、西へ東へと、言うことを聞かない者を倒す旅に出ました。ところが、その旅先で病気になってしまいました。ふるさとの大和をなつかしみ、この歌をよみ、ついに亡くなってしまいました。（中巻・景行天皇）

49

倭方に 行くは誰が夫
隠り処の 下よ延へつつ 行くは誰が夫

皇后・石之比売命の嫉妬を恐れて、故郷の吉備国にもどっていた黒日売を恋しく思い、仁徳天皇は吉備国に黒日売を訪ねて行きました。ともに楽しいひとときを過ごし、天皇が都にもどるときに、黒日売は天皇に歌を差し上げました。（下巻・仁徳天皇）

50



潮瀬の 波折りを見れば
遊び来る 鮪が端手に 妻立てり見ゆ

袁祁命（のちの顕宗天皇）が大魚という名の乙女に結婚を申し込もうとしていたとき、志毘臣も歌垣の場で大魚を誘いました。歌垣とは、男女が集まって歌をよみ合う場です。二人は明け方まで歌で戦い続けました。（下巻・清寧天皇）

学校および各施設関係者、保護者の皆様へ

本製品は子どもたちに、かるた遊びをとおして『古事記』の世界にふれてもらいたいとの思いから、奈良県が独自に企画・制作したものです。

※本製品はリズムのよさやわかりやすさを重視して作成している部分も含まれます。正確な記述を心がけて作成しておりますが、見解・学説等の相違についてはご了承ください。

※神名・人名・地名等の固有名詞の表記にあたっては、小学館『新編日本古典文学全集1　古事記』（校注・訳／山口佳紀、神野志隆光）の記載を参考にしました。

※文言等の漢字表記については、親しみやすさの観点から常用漢字を中心に記載しました。

※ふりがなについては現代かなづかいを基本に記載しました。